

「クモの巣」が「聖ペテロの母」 のヴァリアントである可能性

——フレンワイダー説批判——

小林 信彦

ヘンリー・フレンワイダーが一九八七年に発表した論文（『ファープラ』二八号）によると、ポール・ケイラスの「クモの巣」は「聖ペテロの母」のヴァリアントであるという。「クモの巣」はヨーロッパ人が作った仏教説話であり、一九世紀の終わりから二〇世紀の初めにかけて、一部の熱心な人々によって世界中で読まれた。そして、「聖ペテロの母」は広くヨーロッパに拡散する民話である。それぞれの由来が全く違うだけに、フレンワイダーの着想は極めて興味深いものである。

「聖ペテロの母」（ボルテ／ポリファカ 二二一番）はキリスト教世界でよく知られた話であり、筆頭使徒のペトロが地獄に落ちた母を救おうとして失敗する話である。死んだペテロが天国へ行つて見ると、母親はそこにおらず地獄に落とされていた。この母親が生前にひどく意地悪であったからである。

何とかして救い出そうとして葉の付いた玉葱を地獄に降ろし、それに掴まらせて引き上げようとした。すると、地獄で苦しんでいる外の連中も、ついでに助かるうとして、大勢で同じ玉葱にぶら下がった。それを見て、自分だけ助かるうとするペテロの母は、この者たちを振り切った。直ちに玉葱がちぎれて、ペテロの母は他の連中といっしょに再び地獄へ落ちた。相変わらず意地悪であったからである。

ヴァージョンによってはペテロが関与せず、したがって地獄から引き上げるのもペテロの母ではなく、ただの意地悪婆さんにすぎない。また、引き上げ用に使われるのは玉葱とは限らず、ヴァージョンによっては鐐が用いられることもある。グリム兄弟がミュンスターの近くで採取した「聖ペテロの母」では玉葱や鐐が使われず、ペテロ自身が地獄へ行って母親を助けようとする。そして、外の連中がしがみつくのは母親の衣服である。

フレンワイダーが「聖ペテロの母」のヴァリアントと考える「クモの巣」は、自然に口頭で伝わった民間説話ではなく、仏教をヨーロッパの人々に理解させようとして、文献によって仏教を研究したヨーロッパ人が書いた話である。大枠で仏教の伝承を踏まえた話であるが、非常に興味深いことに、地獄から引っ張り上げようとして失敗する場面がここにも見られる。この点に注目して、フレンワイダーは二つの話の間に系統関係を検討して、「クモの巣」を「聖ペテロの母」のヴァリアントと結論づける。

ケイラスと「クモの巣」

一八九四年にケイラスは雑誌『オーブン・コート』に説話集合『カルマ』を発表した。フレンワイダーが取り上げた「クモの巣」は、この『カルマ』に収められた仏教説話の一つである。作者のケイラスは仏教について豊かな知識を身につけていた。当時のヨーロッパには、高度な仏教文献研究の成果が蓄積されていて、それを効果的に活用する

ことができたのである。『カルマ』もまたヨーロッパ文化圏が生み出した成果の一つであった。

ケイラスはザクセン王国に生まれ、古典文献学を専攻してチュービンゲン大学で学位を取得した。その後はドレスデンの陸軍士官学校の教官となり、ラテン語とドイツ語と歴史を担当した。その頃にキリスト教原理主義に異議を唱え、小冊子を出して『聖書』は偉大な文学の一つに過ぎない」などと主張して物議を醸した。建前として士官教育の基礎をキリスト教精神に置いていた学校側は大いに困ったが、ケイラスは謝罪しようとせず、辞職してアメリカへ行った。

週刊誌『オープン・コート』は「科学に基づいて宗教と哲学を確立すること」を旨として一八八七年にシカゴ近郊で創刊され、一八八八年にはケイラスを編集者として迎えた。発行部数は四〇〇〇〇足らずであったが、一九世紀末から二〇世紀初めにかけてアメリカとヨーロッパが抱えていた問題を取り上げ、知識人から強い支持を受けていた。ケイラスが寄稿を依頼した執筆者の中には、エリオット、ラッセル、デューイ、ポアンカレ、マッハ、ド・フリース、マックス・ミュラーなど、その頃に活躍中の優れた人々が大勢いた。

さて、ケイラスの説話集合『カルマ』は五つの話から成り、フレンワイダーが「聖ペテロの母」のヴァリエーションであると主張する「クモの巣」は、その四番目の話であり、地獄から助け出されかけた悪党が後一步のところで逆戻りする話である。

〔要約〕大盗賊マハードゥタが瀕死の重傷を受けて、苦行者パンタカがその傷口を洗ってやっていました。その時に大盗賊が言いました。「私は悪いことはかりしてきたので、その報いとして地獄へ行くしかない。」これを聞いて苦行者は言いました。「絶望することはない。アートマンが実在しないことを知れば、希望が開けよう。その例として、お前と同じように大盗賊であったカンダタの話をしてやろう。」

大盜賊のカンダタは死んで地獄に行き、百億年以上にわたって恐ろしい苦しみを受けると、ブッダが地上に現れた。その瞬間に光が放たれ、地獄にも達した。すると地獄で苦しむ連中は元気づいた。カンダタはブッダに慈悲を請うた。

ブッダはクモを下へ降ろした。クモが地獄に達すると、カンダタはその細い糸をつかみ、それに取り付いて上へ上へと登って行った。突然カンダタはクモの糸が震えるのに気づいた。地獄にいる仲間が大勢いっしょに登ろうとしていたのである。カンダタは叫んだ。「このクモの巣は俺のだ。お前たちは放れる。」

直ちにクモの巣は破れ、カンダタは地獄へ落ちて行った。「俺のだ」という言葉を口にしたカンダタは、「アートマンの実在をまだ信じていたのである。〔間違った考えを捨てていなかったせいで、この男は救われる機会を失った。〕」

苦行者のパンタカがこの話を語り終えた時に、瀕死の重傷を負った大盜賊のマハードウタは、「私にクモの糸をつかませて下さい」と言いました。「カンダタの失敗を繰り返すまいと決心し、正しい教えを守り抜こうという気になったのです。」

「クモの巣」の直前の物語「盜賊たちの間で」では、マハードウタの率いる盜賊団にパンタカが襲われるが、辛うじて命だけは取り留める。次の日にマハードウタは手下どもに刃向かわれて瀕死の重傷を負うが、駆けつけたパンタカに介抱される。このように、説話集団『カルマ』では、それぞれの話は末尾が次の話と繋がるように工夫されている。

フレンワイダーの指摘する共通点 引き上げ用具とその特性

『聖ペテロの母』にはヴァージョンが数多くあるが、共通する要素としてフレンワイダーが注意を向けるのは、引き上げ用に葉付き根菜（玉葱または蕪）が使われることである。そして、この引き上げ用具の特性として次の事実を指摘する。

《救出されるべき人物が他の連中を振り払うまで、どんなに重いものを支えても、引き上げ用具の張力は十分である。》

意地悪で知られる婆さんを引き上げてやろうとして、葉の付いた玉葱か蕪を地獄へ降ろす。地獄から逃げ出したい婆さんは、これにぶら下がって上へ昇り始める。ところが、地獄には他にも大勢いて、機会があれば逃げ出そうとしている。この連中も玉葱または蕪にしがみつく。そして、大勢の者がしがみついても、この玉葱または蕪はびくともせず、どんな重さにも耐える。しかしながら、自分だけ助かろうとして、婆さんが他の連中を振り払うと、この葉付き玉葱または蕪が切れる。

フレンワイダーによると、「聖ペテロの母」の数多いヴァージョンに見られる葉付き根菜は、ケイラスの「クモの巣」ではクモとして現れる。根菜が節足動物に変換されていることになる。さらにフレンワイダーによると、引き上げ用具に共通する特性（救出されるべき人物が他の連中を振り払うまで、どんなに重いものを支えても、引き上げ用具の張力は十分）は、「聖ペテロの母」の数多いヴァージョンだけではなく、ケイラスの「クモの巣」にも認められる。したがって、フレンワイダーによると、ケイラスの「クモの巣」も「聖ペテロの母」のヴァリエーションと見なすことができる。

フレンワイダーが引き上げ用具に共通すると主張する特性は、『どんなに重いものを支えても、張力は十分』であ

るが、これには《他の連中を振り払うまで》という条件が付いている。コルヴォー男爵の「サン・ピエトロの母ちゃん」では、確かに意地悪婆さんは蹴散らしてじたばたする。玉葱を口に銜えて空いた手でスカートにぶら下がる連中を打つ。引き上げ道具が使われないグリムの話でさえ、ペテロの母は自分の衣服を揺さぶって、しがみつく「靈魂たち」を振り落とそうとする。そして、衣服を揺さぶって他の連中を振り落とそうとした途端に地獄へ再落下する。

検討すべき点（一）《他の連中を振り払うまで》という条件

フレンワイダーによると、「聖ペテロの母」の諸ヴァージョンに見られる引き上げ用具に共通する特性は、《救出されるべき人物が他の連中を振り払うまで、どんなに重いものを支えても、張力が十分である》という点であり、このことがケイラスの「クモの巣」にも当てはまることになる。

しかしながら、ケイラスの「クモの巣」では、クモの糸を登って行くカンダタが後に続く亡者たちを蹴ったり叩いたりすることがない。クモの糸を揺さぶることさえないのである。地獄の亡者たちを落下させるために、カンダタは物理的な力を加えていないのである。《他の連中を振り払うまで》という条件は、ケイラスの話に当てはまらない。

ちなみに、ヴォルコンスキーの「意地悪婆さんを地獄から引き上げる話」では、婆さんが後に続く連中を振り払うことがない。このように、「聖ペテロの母」グループの中にさえ、《他の連中を振り払うまで》という条件が当てはまらない場合があるわけである。フレンワイダーが設定する条件はすでに疑わしい。

シカゴで一八九三年に開かれた世界宗教会議で、ヴォルコンスキーはロシア代表として挨拶したが、その際に「意地悪婆さんを地獄から引き上げる話」を紹介した（バロウズ、「ヴォルコンスキーの挨拶」、『世界宗教会議』、八九一九〇頁）。この世界宗教会議にはケイラスも参加していた。

では、ケイラスの話でクモの巣が破れたのはいつかというところ、カンダタが「クモの巣を離れろ。これは俺のだ」と叫んだ瞬間である。クモの巣が破れてカンダタが再び地獄へ落ちる場面の直後に、作者のケイラスは説明を加える。それによると、クモの巣が破れたのは、「自我についての幻想」がまだカンダタにあったからであるという。ケイラスが「自我についての幻想」という意味の表現を使って語ろうとしているのは、仏教に伝えられる「アートマンは実在するという間違った考え」である。

インドの正統的な考えによると、人間が判断したり感じたりするのは、「アートマン」と呼ばれる精神中枢が内在するからである。アートマンは自由自在に機能し、不変の実体であると考えられている。

ところが、非正統派の仏教によると、アートマンが実在するというのは「間違った考え」であり、幻想に過ぎない。仏教の立場から見ると、人間は五つのグループが仮に集まった構成物に過ぎず、アートマンのように独立して作動するものが存在する余地はない。

仏教を信じる人々によると、生き延びるために奮闘したり自分の独自性を求めようとしていたりする中で、「アートマンが実在するという間違った考え」が起る。そして、このような過程で「私の物という思い」が生じてくる。「究極の解放」を得るためにまず解消しなければならないのは、「アートマンが実在するという間違った考え」である。

「クモの巣を離れろ。これは俺のだ」とカンダタが叫んだのは、「アートマンは実在するという間違った考え」が克服されていなかったからである。カンダタは無条件でブッダの教えを受け入れていたわけではなかったのである。そして、後に続く者たちの重みで切れるのを恐れたのは、安心してクモの巣に縋っていたのではないからであり、無条件でブッダに信頼を寄せていなかったからである。

コルヴォー男爵の「サン・ピエトロの母ちゃん」でもグリム童話の「聖ペテロの母」でも、《他の連中を振り払う

まで》は、引き上げ作業に支障がなかった。ところが婆さんが体を動かして他の連中を追い払うと、引き上げ用具があってもなくても、救出作業が破綻する事態が起こった。この期に及んでも婆さんが意地悪であったからである。

「コルヴォー男爵」という変名を使っていたのは、人の道を踏み外した気違い、フレデリック・ウィリアム・ロルフ（一八六〇・一九一三）である。急に出奔して姿を隠したヴェネチアで、その地に伝わる話を集めて「トトが語った物語」という物語集を作り、一八九六年にロンドンの季刊紙『イエロー・ブック』に発表した（九号）。

「聖ペテロの母」のヴェネチア版とも言うべき「サン・ピエトロの母ちゃん」は、この「トトが私に語った物語」の中に含まれている。一九〇一年にコルヴォー男爵作品集が出たが、これに「トトが私に語った物語」が転載され、ケイラスの目に留まった。

この話が自分の「クモの巣」に似た点があるのに気づいて、ケイラスは一九〇五年に一文を発表して、「〔クモの巣〕を執筆した時点で、『聖ペテロの母』系列の」物語を本で読んでおらず、伝聞で知っていたに過ぎない」と言う（『オープン・コート』一九巻、七五六・七五八頁）。ケイラスが「聖ペテロの母」に言及したのは、この時が始めてであり、クモの巣」が出てから一〇年後のことであった。

グリムの「聖ペテロの母」やコルヴォー男爵の「サン・ピエトロの母ちゃん」では、意地悪婆さんが物理的な力を加えて他の奴らを振り払う。一方、ケイラスの「クモの巣」では、後にく連中にまだ手を出していないうちに、「これは俺のだ」と言っただけで、クモの巣が破れて救出活動は破綻する。アートマンが実在するという幻想をカンダタがまだ捨てていなかったからである。

フレンワイダーによると、引き上げられる者が他の連中を振り払うと、引き上げ用具が切れる。振り払うという意

地悪行為が切れた原因ということになる。ところが、ケイラスの「クモの巣」では、引き上げられるカンダタは他の連中を振り払わない。その代わり、「これは俺のだ」と叫ぶ。引き上げ用具が切れたのは、振り払って意地悪したからではないのである。叫ぶことによって間違った考えが露見したのである。

「クモの巣」を「聖ペテロの母」グループの話と結び付けようとして、フレンワイダーの提示した点は、はからずも二つの話の決定的違いを明確に示すものとなった。ケイラスの作品でクモの巣が破れて救出作業が破綻したのは、作者自身が言うように、カンダタに思いやりが欠けていたからではなく、「アートマンについての幻想」をまだ捨てていなかったからであり、ブッダの教えを完全に受け入れていなかったからである。

検討すべき点(二) ケイラスの「クモの巣」でクモの巣が破れた原因

仏教を信じる人々にとって、「アートマンは実在するという間違った考え」(自我についての幻想)を克服することは、「究極の解放」を得るために欠かせない条件とされる。「クモの巣を離れる。これは俺のだ」とカンダタが叫んだのは、「アートマンは実在するという間違った考え」が克服されていなかったからであり、無条件でブッダの教えに従っていなかったからである。そして、後に続く者たちの重みで切れるのを恐れたのは、安心してクモの巣に縋っていたのではないからであり、無条件でブッダに信頼を寄せていなかったからである。

「アートマンは実在しない」という仏教体系の基本を成す命題の重要性をケイラスはよく認識していて、「アートマン」に「自我」を意味する語を当てて。そして、アートマンが実在するという「間違った考え」に言及して、ケイラスは「自我についての幻想」という意味の表現を使う。究極的に解放されようとする者が必ず成し遂げなければならぬのは、このような「間違った考え」を克服することであるという。

「クモの巣」全体を見渡してみても、「アートマンは実在するという間違った考え」は話の山場で繰り返し取り上げられ、これを軸にして物語が展開している。この短い物語を通じて、仏教体系の核心を成す定理が自然に読者に伝わるように工夫されているのである。

ケイラスの説話では、死を迎えた大盗賊が悪を重ねてきた我が身を顧みて絶望に駆られるが、介護している修行者は救済の可能性が残されていることを説く。そして、このわずかな可能性を実現するのに欠かせない条件として挙げられるのは、「アートマンが実在するという間違った考え」を根こそぎにすることである。そして、地獄で苦しむカンダタにブツダが話しかけて、救われる可能性を説き、そこでも「アートマンが実在するという間違った考え」を捨てることが欠かせない条件とされている。そして、カンダタが再び地獄に落ちた理由を説明する場面にも、「間違った考え」を捨てなかったことが取り上げられ、救済が成らなかった原因とされている。

ところが「聖ペテロの母」の諸本では、葉付き玉葱が切れて婆さんが地獄へ再落下した原因は、相変わらず意地悪であったからである。生きていた時に、意地悪極まりない生涯を送り、コルヴァ男爵の「サン・ピエトロの母ちゃん」によると、聖者の母親は史上最悪のけち女で、ジャガ芋の剥いた皮とチーズの皮しか子供たちに与えなかった。死んで長らく地獄の苦しみを受けていたのが、息子が天国の有力者であったお陰でやっと救出されることになったのに、この期に及んでも相変わらず他人を思いやることなく、玉葱に群がる他の連中に怒鳴りつける。これでは助かりようがない。玉葱がちぎれて再び地獄へ真逆さまである。

「クモの巣」も「聖ペテロの母」の諸本も、引っ張り上げる用具が同じように駄目になる話ではあるが、駄目になる原因がまるで違う。「クモの巣」に登場するカンダタの場合は、ブツダを信頼していなかったことがばれて救出手続きの前提が失われ、手続きそのものが効力がなくなった。「聖ペテロの母」の諸本に登場する意地悪婆さんの場

合は、地獄でさんざん苦しんだにもかかわらず、他人への思いやりのなさが普通であった。これではいくら息子が有力な聖者でも、手の打ちようがない。

このように、「クモの巣」と「聖ペテロの母」には、ハイライト・シーンをなす落下場面が同じように設定されているものの、落下が起こる原因がまるで違う。「クモの巣」と「聖ペテロの母」ではよって立つ文化が異なるのである。このように、引き上げ用具が駄目になった原因を取り上げても、「クモの巣」と「聖ペテロの母」は全く異質な話であり、同じ話のヴァリエーション同士と見なすわけにはいかない。

検討すべき点 (三) ブッダの口から放たれた光

ケイラスが書いた話で、クモの糸が破れ救出作業が破綻したのは、カンダタが意地悪であったからではなく、ブッダの教えを受け入れていなかったからである。そして、事態がこういう結果になる伏線は、すでにカンダタの話の冒頭に用意されている。

〔要約〕百億年以上にわたってカンダタが地獄で苦しんでいると、ブッダが地上に出現した。その瞬間に光が放たれ、それが地獄まで届いた。すると、地獄にいる者たちは、元気づけられて希望を抱いた。次に、ブッダはクモの巣に乗せたクモを地獄に降ろした。

ここではブッダの出現の際に起こった一連の出来事が簡潔に記述されている（光が放たれる―光が地獄まで届く―地獄にいる者たちが元気づく―クモが地獄へ降ろされる）。長尾佳代子が指摘するように、『仏教文学』二七号、ここに描かれる出来事の連続は、代表的な仏教説話集『アヴァダーナシャタカ』と『ディヴィヤーヴァダーナ』に繰り返される記事に一致する。それはブッダが微笑んで光を発する話である。

ブッダたちが微笑すると、青・黄・赤・白の光が口から放たれ、あるものは下に行き、あるものは上に行く。下に行くものは、サンジヴァ、カーストトラ、サンガータ、ラーウラヴァ、マハーラーウラヴァ、タパナ、プラターパナ……などの地獄へ行く。暑い地獄には寒くなって落ちる。そして寒い地獄へは暑くなって落ちる。そのせいで、「いろいろな地獄にいる」連中「が味わう苦しみ」の原因、「地獄ごとにそれぞれ」固有の原因が和らげられる。この連中は考える。「皆さん。我々は〔死んで〕ここから〔どこかへ〕落ちたのであろうか。あるいは他の所で生まれたのであろうか。」

「清らかな信仰」を生じさせるために、ブッダは「〔超自然力によって〕作り出された者」を放つ。「〔超自然力によって〕作り出された者」を見て、「地獄の」連中は考える。「皆さん。我々は〔死んで〕ここから〔どこかへ〕落ちたのではなく、他の所で生まれたのではない。そうではなく、前に見たことがない生き物がここにいて、その超能力のお陰で、我々の苦しみ〔、地獄ごとに〕固有の〔苦しみ〕が和らげられるのだ。」

「地獄の」連中は「〔超自然力によって〕作り出された者」に対して心を清らかにして〔全幅の信頼を寄せ〕、地獄で経験すべき「行い」〔の「報い」〕が消滅すると、〔悪い行い〕に相当する量の「辛い報い」を味わい尽くすと、神々の世界や人間の世界に再び生まれて、そこで「四つの真理」を身につけた。〔こうして、最後には「究極の解放」に通じる道が開けてきた。〕

ここで「ブッダの口から放たれた光」と言われているのは、ブッダが説いた真理の比喩である。ここに出て来る「〔超自然力によって〕作り出された者」とは、ブッダが超自然力を使って作り出した者のことであり、ブッダに全幅の信頼を寄せさせるために派遣される。

「四つの真理」とは、ブッダの教えを四つの項目にまとめたものであり「〔生きることは苦しみである〕」、「苦しみの

原因は欲望である」「目指すべき理想は欲望を消すことである」「欲望を消す方法が八つある」「これを身につけると、正しいものの見方が確立し、もはや迷うことがない。これで将来の見通しがついたわけである。

ブッダが地上に出現して光を放つと、それが地獄へ届く。すると、地獄にいる連中は苦しみが和らぐ気がする。次に、ブッダは「超自然力によって」作り出された者を地獄へ派遣する。地獄の連中はこれに心を寄せる。「定められた地獄滞在期間が終わって」前世の「行い」の効力が消えた時、地獄の連中は神々の世界または人間の世界に生まれる。そして、「四つの真理」を身につけ、いつか未来にブッダになる見通しが立つ。

検討すべき点（四）話の下敷として使われた仏教伝承

ケイラスの「クモの巣」では、カンダタが登場する場面が「百億年以上にわたってカンダタが地獄で苦しんでいる」という意味の表現で始まる。ここで「百億年以上にわたって」を表すのに用いられているのは、途方もない数「四三二一〇の七乗」を指すサンスクリット単語「カルパ」である。ケイラスはインド的な状況設定でエピソードを始めているのである。

ブッダが地上に現れてからクモが地獄へ派遣されるまでの部分は、仏教で伝えられる「ブッダが光を放つこと」の前半によく対応する。もっとも、仏教で伝えられる「ブッダが光を放つこと」は物語ではなく、ブッダが発する光の効果について報告する記事に過ぎない。名前が付いた特定の人物が登場するわけではない。

仏教の伝承に触発されて、ケイラスは一つの物語を作った。救出の対象となるのは、地獄で苦しんでいる者一般ではなく、カンダタという特定の悪党である。ブッダの代理として派遣されるのは、「ブッダの超自然力によって」作り出された者」一般ではなく、クモという具体的な小動物である。

「クモの巣」

光が放たれる

光が地獄まで届く

地獄にいる者たちが元気づく

クモが地獄へ降ろされる

「ブッダが光を放つこと」

光がブッダの口から放たれる

「光が」地獄へ行く

「苦しみの」原因が和らげられる

「作り出された者」が降ろされる

「クモの巣」で「地獄にいる者たちが元気づく」と言われている場面は、「ブッダが光を放つこと」の記述に対応する。仏教説話に反復される記事に、「ブッダの光を受けて苦しみの」原因が和らげられ「て、地獄にいる連中が元気づく」と言われているのである。そして「クモの巣」に登場するクモは、仏教文献でお馴染みの「超自然力を使って」作り出された者」であり、ブッダの代理として地獄へ派遣される。

少なくとも、クモが地獄へ降ろされるまでは、事態の成り行きが「ブッダが光を放つこと」に見られるのとよく一致している。カンダタが登場する場面を始めるに当たって、作者は仏教の文献で伝えられている「ブッダが光を放つこと」を踏まえているのである。

一八九四年に公刊された「クモの巣」を執筆していた頃、ケイラスは「ブッダが光を放つこと」を翻訳で読むことができた。早くから『アヴァダーナシャタカ』の研究をしていたフェールは、やがて全編の翻訳を完成して、一八九一年には『ギメ博物館年報』一八号に発表していたのである。

仏教説話集の『アヴァダーナシャタカ』や『デイヴィヤーヴァダーナ』で繰り返し語られる「ブッダが光を放つこと」では、それまで地獄で苦しんでいた連中が「神々の世界や人間の世界に再び生まれ」る」と言われる。そして、その後に「そこで四つの真理を身につけた」と言われる。

前世の「悪い行い」にふさわしい苦しみの期間が終わると、地獄で苦しんでいた連中に「心の移転」が起こるが、その際に心の移転先になるのは「神々の世界」あるいは「人間の世界」に住む者の身体である。これはブッダの光を浴びてブッダの代理のクモに接触したからであり、ブッダから真理を伝えられたからである。

もしブッダの光を浴びることがなく、ブッダの代理であるクモに接触することがなかったなら、すなわちブッダから真理を伝えられる機会がなかったなら、人間以外の動物の身体に心が移ったかもしれない。そうなったら、ブッダになる準備をするのが困難になり、「究極の解放」が遠のくのである。しかしながら、ブッダから真理を伝えられる機会があったお陰で、「神々の世界」や「人間の世界」に生まれることができ、ブッダになる準備を進めることができた。その結果、「四つの真理」を身につけた。

「四つの真理」を身につければ、もうしめたものである。これで正しいものの見方が確立し、もはや迷うことがなくなる。これでブッダになる見通しがついたわけである。仏教で伝承される「ブッダが光を放つこと」は、ブッダの教えに間違いがないことを伝えるものである。それに従う限り、後はすべてうまく行くに決まっている。

ところが「クモの巣」は運の良い悪党の話ではなく、悪い見本の話である。ケイラスの作品が「ブッダが光を放つこと」を踏まえているのは、クモが地獄へ降ろされるまでである。ブッダの光を浴びたかもなく、以後のカンダタは愚かな反面教師でしかない。

検討すべき点(五) 途中で仏教伝承から離れる「クモの巣」

「ブッダが光を放つこと」の記事では、ことの進展が非常にゆったりしている。恐らくさらに数カルパにわたって地獄に滞在してから、その身体が死んで心が移転して、「神々の世界」や「人間の世界」に住む者の身体に入ったの

である。ところがケイラスの「クモの巣」では、ことの進展がそれほどゆったりしていない。それどころか、超高速でことは進む。何しろ、カンダタはそのまゝの姿で直ちに地獄から引き上げられるのである。

「ブッダが光を放つこと」には、「神々の世界や人間の世界に再び生まれる」という展開が見られる。これに対応するはずであったのは、カンダタが期待した展開「登って地上に出る」であるが、仏教の立場からすれば、こういうことはありえない。地獄に住む者は生殖によって生まれた動物ではなく、「忽然として現れ出た者」である。地獄にしか生存できず、同じ身体で地上世界へ移動することはない。地獄に住む者の身体が死んで心だけが地上に移動し、人間の胚が発生した瞬間に入り込むのである。

ところがケイラスのカンダタは、「心の移転」を抜きにして、地獄に住む者の身体のまま、自分で動いて地上世界に出ようとする。このように仏教の伝承に相容れない記述をするケイラスは、もはや「ブッダが光を放つこと」を踏まえていない。

ブッダは真理を説くが、自らの意志で人間の運命を変えることはない。説かれた教えに従うかどうかは当人の勝手であり、ブッダの知ったことではない。仏教の原則に立てば、「行いと報いの対応法則」によってすべては自動的に進行し、ブッダといえどもこれに干渉することはできない。「悪い行い」をした者は、「法則」によって自動的に決まる「辛い報い」が終わるまで、打つ手は何もないのである。何か悪いことを一度したら、もう取り返しはきかない。仏教の原則に従う限り、前世の「悪い行い」に対応する期間だけ、地獄に滞在するほかないのである。

自分の作り出したクモをブッダが地獄へ送り出すことは、確かに仏教の伝承を受けている。しかしながら、クモの役割が伝承を逸脱していて、カンダタを直ちに地獄から脱出させるために使われているし、地獄に苦しむ連中が大勢いる中で、カンダタだけを解放しようとしている。仏教の伝承でブッダが自分で作り出したものを派遣するのは、ブッ

ダへの全幅の信頼を生じさせるためであり、一人だけを選んで「辛い報い」を中断するためではない。

カンダタが登場する場面の冒頭では、仏教文献で伝えられる通りに出来事が連続するのであるが、クモが降ろされてからは、それまでと一変して、ことの進展が仏教の伝承から逸脱したものとなっている。クモの巣に乗るように勧められて、言われた通りにしたカンダタは上へ上へと登って行くのである。仏教で定められた手順を無視して、ゆったりと時間をかけることなく、直ちに地獄の苦しみからの解放が図られるのである。

「クモの巣」

「ブッダが光を放つこと」

クモに勧められてクモの巣に乗る

「作り出された者」に対してひたむきな信頼が生じる

登って地上に出る（不発）

地獄の苦しみが終わると、神々の世界や人間の世界に再び生まれる

（なし）

四つの真理を身につける

ケイラスは「行いと報いの対応法則」を無視して、地獄での滞在期間を勝手に中断してカンダタを救出することを思いつき、それが不首尾に終わる劇的場面を思いつく。地獄での滞在期間を勝手に中断することとは、「行いと報いの対応法則」に干渉するということであり、仏教で決められているブッダの役割を逸脱している。ここで作者のケイラスが何かの資料を踏まえているとすれば、それは仏教以外のものであろう。

「クモの巣」

「聖ペテロの母」

クモを地獄へ降ろす

玉葱を地獄へ降ろす

カンダタを引き上げ始める

婆さんを引き上げ始める

これは俺のだと叫ぶ

他の連中を追っ払う

真理を受けいれていない

相変わらず意地が悪い

救出作業が破綻する

救出作業が破綻する

ブッダがクモを降ろしてからクモの巣が破れて地獄へ再落下するまで、物語は仏教の原則から逸脱して展開する。この部分が「聖ペテロの話」から触発されてケイラスの心に浮かんだにせよ、カンダタが再び地獄へ落ちた理由を説明する箇所では、作者は再び仏教伝承に復帰して、カンダタが「アートマンは実在するという間違った考え」を捨てていなかった事実を指摘する。

途中で仏教の伝承から大いに逸脱するものの、さすがに仏教研究に熱心であったケイラスだけのことはあり、カンダタが再び地獄へ落ちる場面の直後で、仏教の正道に立ち返って状況を説明している。フレンワイダーが主張するように「クモの巣」が「聖ペテロの母」から着想を得たにしても、それは限られた範囲の中である。この話の本筋はあくまで仏教伝承を踏まえたものであり、「クモの巣」は「聖ペテロの母」のヴァリアントではない。

検討すべき点(六) 真理を受け入れないせいで無効になった特別措置

以前の生涯で極悪の「行い」を重ねた者、その「報い」として地獄で恐ろしい苦痛を受けている者には救いがない。今の状況が絶望的であるの言うまでもないが、それが終わった後のことを思っても、今これほど悲惨な生涯を送っている者からすれば、絶望感が薄れるものではない。地獄にいる限りは「善い行い」をする機会がないのであるから、それに対応する「幸せな報い」を未来に期待することもできない。よりましな来世を求めて未来に希望を託することができないのである。地獄暮らしが終わった後で限らない数の生涯が繰り返されても、何か良いことがありそうもない。

ところが、めったにない機会がある。それはブッダが地上に出現した時であり、ブッダが微笑を浮かべて光を放つ

た時である。その機会を逃さず無条件でブッダの教えを受け入れ、ひたすらブッダに信頼を寄せるなら、地獄を出た後は有利にことが進行し、「究極の解放」を得てブッダになる道が開けてくる。ブッダの出現に遭遇した場合にだけ、地獄に住む者たちに最も望ましい未来の可能性が与えられるのである。この意味では特別の措置と言えよう。そして、ブッダの教える真理が受け入れられている限り、この特別措置は有効なのである。この前提が欠ければ、特別措置は自動的に無効になる。

この特別措置は二つの段階を踏んで実施される。ブッダが微笑を浮かべて光を放つのが第一段階であり、このようにして真理が伝えられる。「超自然力によって作られた者」が派遣されるのが第二段階であり、こうしてブッダへの信頼が生じる。ケイラスが作った仏教説話でも、仏教で伝えられる伝承の通りに、光が放たれて真理が伝えられた。そして、クモが「超自然力」によって作り出されて、ブッダへの信頼が生じさせるために、これがカンダタのいる地獄に派遣された。光を浴びてブッダの教えに無条件で従うこと、そして安心してクモの巢に縋ること、これがこの希有の機会を生かすことに外ならない。

めったにない機会を与えられたカンダタは、ブッダの教えを受け入れて「間違った考え」を捨てさえすれば、ひたすらブッダに信頼を寄せさえすれば、最悪の現状の中に希望が沸いてきて、未来に期待を持てるようになり、「究極の解放」に向かって一步を踏み出すことができるようになる。

特別措置と言っても、「行いと報いの対応法則」が歪められるわけでもないし、例外的に棚上げされたりしているわけでもない。ブッダの出現に巡り逢ったのは僥倖であるにしても、それを生かすも生かさぬも本人次第であり、ブッダが発した真理の光を受け止めるか遣り過ぐすかは本人の選択である。真理を受け止めて自分のものにする、これは「善い行い」である。しかも最高水準の「善い行い」である。当然ながら、最高水準の「幸せな報い」を受けて、

「究極の解放」に至る道が開ける。

ところが、大勢の者が後に続くのを見て、カンダタはクモの巢が重みで破れるのを恐れ、「クモの巢を放せ。これは俺のだ」と叫んだ。安心しきってクモの巢に縋っていたのではないからであり、無条件でブッダに信頼を寄せていなかったからである。そして、「アートマンが実在するという間違った考え」を克服していなかったからである。カンダタは無条件でブッダの教えに従っていなかったのである。

「アートマンが実在するという間違った考え」が起こる過程で「私のものという思い」が生じる。「クモの巢は俺のだ」と叫ぶことによって、カンダタは「私のものという思い」があることが表面化し、その前提である「間違った考え」が残っていることが露呈した。カンダタには「間違った考え」が克服されていないことが判明したのである。

ブッダの教えは受け入れられておらず、ブッダへの信頼は確立されていなかった。せっかくの特別措置は、当然の前提が失われたので、自動的に効力をうしなったに過ぎない。言うことを聞かなかったのに気づいて、ブッダが怒ったからではない。教えを受け入れるかどうかは受け入れ側の問題であって、ブッダので知ったことではない。カンダタがせっかくの機会を生かせなかったのである。これで特別措置はなかったことになり、後はすべてが正常に戻って、カンダタは元通りに「辛い報い」を地獄で受け続けることになる。

検討すべき点(七)「思いやりの欠如」対「正しい教えの欠如」

ペテロの母親は思いやりの欠けた女として一生を送り、そのために今は地獄にいたのであるが、たまたま息子が天国の有力者であるお陰で、特別扱いを受けて天国へ移して貰うことになった。そのように大事な場面になっても、本人は自分の立場をわきまえず、いっしょに地獄で苦しむ他の連中を思いやることなく、自分が助かることしか考えな

い。

一方カンダタは前世で大盗賊であり、悪の限りを尽くして人生を送った。その「報い」を受けて、今は地獄で恐ろしい苦痛を味わっている。このように絶望的な立場にあるカンダタは、めったにない好機に恵まれることになった。ブツダが地上に出現して、その口から光を放ったのである。

ブツダが地上にしようといまいと、真理は常にあらゆる所で有効であり、すべては「行いと報いの対応法則」の通りに自動的に進行する。しかしながら、そういうことは並の人間にはなかなか分からない。カンダタは悪い奴であったが、恐ろしく運が良かった。ブツダの出現に遭遇して、じかに真理を伝えられることになったからである。このように千載一遇の機会が訪れたにもかかわらず、ペテロの母親と同じように、自分のことだけを考え、他の連中に思いやりをかけることがない。

ちなみに、ヴォルコンスキーの「意地悪婆さんを地獄から引き上げる話」に登場する婆さんは、後に続く奴らに手を出すことがなく、「私を放せ。これは私のものだ」と怒鳴るだけである。この限りでは「クモの巣」のカンダタと同じである。ヴォルコンスキーの話に登場する婆さんも「クモの巣」に登場するカンダタも、同じように「これは私のものだ」と言っているのであるから、両方とも思いやりが欠けていることになるろう。

そうすると、ペテロの母親と同じように、カンダタも意地悪のせいで地獄脱出が見送られたのではないか。それが立証されれば、「クモの巣」を「聖ペテロの母」のヴァリエーションと見なそうとするフレンワイダーは、もっと有利に論議を展開することができよう。この点に気づかなかったのか、フレンワイダーは問題として取り上げることさえない。

しかしながら、このような見地からフレンワイダーが問題を取り上げたにしても、やはり最後まで踏ん張ることは

できなかったであろう。「聖ペテロの母」の諸本で語られているのは、試みられた救出作業が失敗する話以上のものではない。しかしながら、「クモの巣」ではその直前に「ブッダが微笑んで放つ光」を踏まえた導入部があり、直後には救出作業の失敗が「自我についての幻想」に帰せられている。大枠において、カンダタが登場する場面は仏教の伝承に添っているのである。

途中で仏教の原則から逸脱してはいるものの、「クモの巣」は大筋で仏教の伝承を受けている。そして、『カルマ』全体が仏教を伝えようとして書かれている。カンダタは正しい教えを受け入れていないことが露見して、すべては元の本阿弥となった。この失敗物語は悪い手本として役立てることができ、これを聞いた瀕死の大盗賊のマハードウタは、「私にクモの巣をつかませてください」と言って、正しい教えを守り抜こうと決意する。

ヴォルコンスキーの話でも「これは私のものだ」という言葉が発せられるが、これはロシアの婆さんが言ったことであり、アートマンの实在肯定などを踏まえたものではなく、単に思いやりの欠如を示すに過ぎない。この婆さんが発した「これは私のものだ」という言葉は、体を揺すったり手足を動かしたりするのと同じように、後に続く連中を追っ払うための強硬手段に過ぎない。

同じように「これは俺のものだ」と言ったにしても、「クモの巣」に登場するカンダタは、インド世界の文化を継承する人物として設定されている。ケイラスが説明するように、「これは俺のものだ」というカンダタの言葉は、「自我についての幻想」すなわち「アートマンが実在するという間違った考え」を露にするものである。このことは再落下場面の直後に説明されているだけでなく、わずか一〇〇行足らずの小作品「クモの巣」の中で何度も反復されている。語の意義は語が発せられた状況の中で決まるのであり、たまたま同じ言葉が発せられているからといって、二つの作品の間に共通の主旨があるわけではない。

ケイラスが「自我についての幻想」という表現を使って語ろうとしているのは、「アートマンは実在するという幻想」というインドのアイデアである。これは思いやりの欠如ではないし、近代社会でよく話題にされるエゴイズムでもない。近代人にとって「自我」は幻想ではなく、現実人間の心に抜き難く潜むものである。ここでケイラスが設定しようとしているのは、エゴイズムともヒューマニズムとも縁がない古代インドの世界である。

検討すべき点（八） たった一つでもよいから何か善いこと

このカンダタが登場する場面の書き出しを見ても分かるように、また作者が別の機会に言っているように、「クモの巣」は仏教説話として作られたものである。しかしながら、ケイラスがどんなつもりであったにせよ、話の途中で仏教の伝承から逸脱しているのも確かである。そして、作者自身が意識していたかどうかはともかく、この逸脱部分に「聖ペテロの母」を思わせるものがあるのも確かである。引き上げ用具を使って、たちの悪い者を地獄から救い上げる。そして、救出される側のせいで、この救出作業は失敗に終わる。この限りでは、「クモの巣」も「聖ペテロの母」も同じである。

この点で注目すべきは、「クモの巣」の第一東京版にはなかった箇所が第二東京版に追加されていることである。『カルマ』は一八九五年に東京で単行本として発行されたが、翌年の一八九六年には再版が出ている。そのうち初版を「第一東京版」と呼び、再版を「第二東京版」と呼ぶことにする。

東京版を発行した長谷川武次郎は、細かい皺をつけた特殊な和紙を使い、鈴木華郎に描かせた挿絵を入れている。一八九三年のシカゴ万国博覧会に長谷川は縮緬本を出品したが、展示を見てケイラスは強い関心を抱き、『カルマ』の縮緬本を出版させることになった（石澤小枝子、『ちりめん本のすべて』、一七六頁）。

さて、第一東京版は、『オープン・コート』に掲載されたのとはほとんど変わらないが、第二東京版では、前世のカンダタに言及して「クモが這っているのを見て、踏み潰すのを控えた」という旨の文が加えられている。そして、地獄にもっといて当然の悪党を救出する口実として、「前世でクモを殺さなかったこと」が使われるのである。

〔要旨〕「ブッダは」言った。「カンダタよ。お前は親切な行いをしなかったか。それが今お前に帰って来て、お前が再び〔地獄から〕上がるのに助けになるだろう。」カンダタは黙っていた。ブッダはその全知の力で哀れな男が〔前世で〕行った行爲を見た。そして、生涯に一度だけクモを踏み付けなかったのを知った。

では、このような口実を欠いていたわけであるから、『オープン・コート』に掲載されたテキストと第一東京版テキストは、物語構成に欠陥があるのであろうか。そうではない。「クモの巢」が仏教説話である限り、ブッダが微笑んで放つ光は、地獄で苦しんでいる連中にも届くのであり、その全員を元気づけて希望を抱かせるのである。「せめて一つだけでも善いことをしたことがある」という条件は付いていない。ブッダが放つ光は相手を選ばないのである。「善い行い」をしていようとしてしまいと平等に機会が与えられる。最初の原稿で「一度だけ善いことをした場面」を入れなかったケイラスは、仏教伝承をよく承知していた。

ところが、コルヴォー男爵の「サン・ピエトロの母ちゃん」やヴォルコンスキーの「意地悪婆さんを地獄から引き上げる話」を見ると、希代の意地悪婆さんを地獄から救い出すには、「たった一つでもよいから何か善いこと」を捜し出すことが必須の条件となっている。コルヴォー男爵の話に登場する意地悪婆さんは、飢え死にしかけている乞食女に玉葱の葉を投げ与えたことがあり、これで一生の間に一度だけ善いことをしたことになるわけである。ヴォルコンスキーの話に登場する意地悪婆さんも、人参を一本だけ腹を減らした女にやった覚えがあり、一生に一度だけ善いことをしたわけである。いずれの場合も、一生に一度だけ他人を助けるのに使ったものが引き上げ用の用具に使われ

ることになる。

第二東京版を印刷する前に元の話を読み返していた時に、ケイラスが「一つだけ善いこと」に言及する必要性を感じた背景には、どこかで聞いたことのある「聖ペテロの母」がケイラスの意識下から蘇った可能性は大いにある。

さらには、カンダタを地獄から引っ張り上げる場面を描写した際に、そしてクモの巣が破れてすべては元の木阿弥になった場面を描写した際に、「聖ペテロの母」のいずれかのヴァージョンが作者の念頭にあった可能性は大いにある。ここでも主人公を引き上げるために使う用具（クモ）は、前世で行った「たった一つの善いこと」に深い関係のあるものである。そして、この場合は他人に与えたもののどころか、殺さずに命を助けた小動物そのものである。

「聖ペテロの母」が作者の念頭もあったとしても、そういうことは「クモの巣」の大筋にかかわることではない。主人公のカンダタが再び地獄へ落ちる場面の直後で、こういう結果に終わったことについて、作者のケイラスは「自我の幻想がまだカンダタにあったからだ」と説明している。ここで地獄へ再落下したのは、意地悪であったからではなく、実在しないアートマンが実在するという幻想を抱いていたからであり、まだ間違った考えを捨てずにブッダの教える真理を受け入れていなかったからである。

「ブッダが光を放つこと」を踏まえた「クモの巣」には、コルヴォー男爵の「サン・ピエトロの母ちゃん」やヴォルコンスキーの話の場合と違って、「たった一つでもよいから何か善いこと」など持ち込む必要はなかったのである。わざわざ第二東京版でこれが持ち込まれたということは、作者が意識していたかどうかは別として、どこかで聞いた「聖ペテロの母」が突然ここで記憶から蘇り、その筋運びが気になったのであろうか。

ブッダの教える真理を受け入れていなかったことへの思い入れは、「ブッダが放つ光のこと」で伝えられる仏教の伝承を受け継ぐものである。語られているのは、ブッダの教えに従うことの大切さであり、これこそ「蜘蛛の巣」全

体を貫く主題である。カンダタが千載一遇の機会を生かせなかった理由はただ一つ、ブッダに絶対の信頼を寄せてブッダの説く真理を無条件で信じなかったからである。

検討すべき点(九) ポール・ケイラスの壮大な夢想

太古の世界についてケイラスは壮大な夢を見ていて、すべては同じ源に溯ると信じている。そして驚いたことに、自分が作った話についてさえ、同じことを考えているのである。コルヴォー男爵の「サン・ピエトロの母ちゃん」を読んだケイラスは、自分の作った物語との関連について考えるよりも、その際に浮かんだ壮大この上もない夢想について語る。

もしある説話がいつか発見されて、人参や玉葱の葉の話(「聖ペテロの母」の諸本)よりも私の「クモの巣」の方がそれに近いとしても、私は不思議に思わないだろう。(『オープン・コート』一九卷、七五八頁)

ケイラスが目指していたのは、現存する文献に忠実に古代の宗教を再現するに留まらなかった。「真実は一つ」の思いを抱いていたのである。「文化圏によって違った表現をとるものの、究極的には一つに帰せられる」と信じていたのである。現存まで伝わる文献に見られるのは、その痕跡ということになる。

ケイラスはこのことを自分の作品にも当てはめるのである。ケイラスにとって、ヨーロッパ中に拡散する「聖ペテロの母」の諸本も自分が作った「クモの巣」も、しょせんは同じ原型の変化形態に過ぎない。そして、ヨーロッパで伝えられている民話よりも、自分の作品の方が真正な状態をよく保持している可能性があるのである。

「クモの巣」を「聖ペテロの母」のヴァリアントと考えるフレンワイダーも、これが仏教説話の伝承を受けていることを無視できず、玉葱や蕪とクモを結ぶ連結環が見つからないことを気にしている。フレンワイダーが「聖ペテロ

の母」の鍵と考える引き上げ用具は、多くのヴァージョンで野菜として現れるのに対して、「クモの巣」では小動物として現れる。植物と動物の違いだけではない。玉葱や蕪は自然に発生した植物に過ぎないが、このクモは仏教の伝承を受けたものであり、自然に生まれ育った動物ではなく、ブッダが「超自然力によって」作り出した者」である。ブッダの意志を代行する存在であるから、並の人間以上の知恵があり、人間に向かって口を利く。ブッダの意を酌んで、人間に適切な指示をするのである。「クモの巣」で地獄へ派遣されるクモは、カンダタに指示して「クモの巣に乗れ」と言う。

一つがただの根菜で、もう一つがただならぬ節足動物では、違いがあまりにも大きすぎる。しかも、ただならぬ節足動物が現れるのは、フレンワイダー自身がヴァリエーションとして提唱しようとしている「クモの巣」だけである。レインワイダーの立場からすれば、根菜と節足動物を結ぶミッシング・リンクが欲しいところであろう。そこで、「この伝説のヴァリエーションがもっと多く見つかると、そしてその起源が辿られると、ケイラスの推論が間違いないと証明されるであろう」という言葉で、フレンワイダーは論文を終えている。

コルヴォー男爵の「意地悪婆さんを地獄から引き上げる話」に関連して、ケイラスは自作に言及しているが、そこで語られているのは壮大な夢想であって理詰め of 推論ではない。こんなことを真に受けてはいけない。自分の作った話を人類文化史の中に位置付けようとするケイラスは、誇大妄想の一九世紀人であった。人類文化についても自身自身についても、ケイラスは現実離れをした幻を見ていた。

インド文化圏とヨーロッパ文化圏は、それぞれ独立して発展を遂げた世界である。それぞれの文化を構成する各要素は、単一の根源から派生したのではないし、同一の根本原理から顕現したのでもない。仏教文献に伝わる「超自然力によって」作られた者」とキリスト教世界の民話に伝わる野菜との間にミッシング・リンクなどあるわけではない。

誇大妄想のケイラスが作品発表の一〇年以上も後で取り留めもなく言った戯言など、フレンワイダーはまともに取り上げるべきでなく、作品そのものの分析から結論を出すべきであった。

作品そのものを詳しく読むべきであったフレンワイダー

フレンワイダーの達した結論によると、ケイラスの「クモの巣」は「聖ペテロの母」のヴァリアントであるという。ヨーロッパ文化圏で作られた仏教説話をヨーロッパ中で親しまれている民間伝承と結び付けようとするものであり、その限りでは非常に興味深いものである。しかしながら、「クモの巣」を含む説話集合『カルマ』そのものからも知られるように、また数多い外の著書からも知られるように、ケイラスは熱心に仏教文献を研究した人であり、作品には仏教伝承に添った背景が巧妙に設定されてる。

フレンワイダーはヨーロッパ文化圏に属する人であり、その気になれば楽にできたことを怠って肝心のことを見落としている。フレンワイダーは『カルマ』そのものをもっと細かく読むべきであったし、ケイラスの外の作品も読むべきであった。さらには、ケイラスの読んだと思われる仏教文献を検討すべきであった。残念ながら、部分的な並行現象と表面的な類似に目を奪われて、「アートマンが実在するという間違った考え」に注意を払うことがなく、「クモの巣」の主旨を取り損ねた。その結果、「クモの巣」が「聖ペテロの母」のヴァリアントであるという誤った結論を導くことになった。